

1. 単元構成のあり方と評価の方法（当校での評価の観点と方法について）

評価の目標・意義

教育課程審議会は、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方（答申）」（平成12年12月4日）で、「生きる力」を育成するための評価のあり方について基本的な考え方を示した。この中で、「第1章 第2節 これからの評価の基本的な考え方」として下表の5点を挙げた。

ア 学力については、知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容を確実に身につけることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」が育まれているかどうかによってとらえる必要がある。

イ これからの評価においては、観点別学習状況の評価を基本とした現行の評価方法を発展させ、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を一層重視するとともに、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫することが重要である。

ウ 学校の評価活動は、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら展開されるものであり、指導と評価の一体化を図るとともに、学習指導の過程における評価の工夫を進めることが重要である。また、評価が児童生徒の学習の改善に生かされるよう、日常的に児童生徒や保護者に学習の評価を十分に説明しておくことが大切である。

エ 評価に当たっては、教育活動の特質や評価の目的等に応じ、評価の方法、場面、時期などを工夫し、児童生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要である。

オ 評価活動を充実するためには、各学校において、評価の方針、方法、体制などについて、校長のリーダーシップの下、教員の共通理解を図り、一体となって取り組むことが不可欠である。また、各教員が、評価についての専門的力を高めるため、自己研鑽に努めたり、校内研究・研修を実施することなどが重要である。

教育課程審議会答申（平成12年12月4日より抜粋）

このように、今回の学習指導要領の改訂では、学力観及びそれに伴う評価のあり方についての再考が必要とされており、相対評価による生徒の知識中心の評価から、評価基準に照らした絶対評価を重視して、子ども達のよい点や可能性、進歩の状況などを評価する個人内評価を工夫する評価活動への変更が重要となっている。また、その評価は生徒の発達段階に合わせた適切な時期に行い、その結果を生徒へフィードバックすることで生徒自身の達成感育成や今後の学習計画の立案・今後の可能性の拡大など、自分自身の理解を振り

## 第4章「LIFE」の事例、単元と評価

返るメタ認知的活用をしたり、教材や指導方法など教師側の改善・工夫の資料としても活用することで、評価と指導の一体化を図ることが重要となっている。

特に、平成10年度告知の学習指導要領で創設された「総合的な学習の時間」の評価では、これらの視点が重要であり、各単元目標や評価基準の明確化、評価方法の提示を行い、評価と指導を行っていかねばならない。

### 評価の方法

総合的な学習における評価では、テストで測定できる知識を中心とするのではなく、「生きる力」の評価が重要であり、生徒の意欲や関心、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決力などを中心に据える必要がある。当校では、「興味・関心・態度」、「表現・技術・能力」、「思考・判断」、「知識・理解」を観点とした。

このような能力の評価には、アメリカで「標準化されたテスト」に代わる評価法として1980年代後半から注目を集めている「真正アセスメント(authentic assessment)」が有用である。「真正アセスメント」とは、子ども達が教室で行っている実際の活動に即した形で、教師子ども達自身が学習のプロセスや成果について継続的に評価することであり、つぎの4つの特徴を持つ。

- (1) 教室での活動や子ども達の体験に密着した評価を行う。
- (2) できるだけ多くの活動から、子ども達が学んだ証拠を集めた評価を行う。
- (3) 評価の結果が、子ども達や教師に直接フィードバックされるので、子ども達の動機付けを高めて、学習を促進する。
- (4) 学習が行われている現場での価値や基準を反映した評価にする。

(山口悦司 「理科におけるオーセンティックアセスメントがもたらす効果」理科の教育12月号、2001年、東洋館出版社より)

つまり、オーセンティックアセスメントでは、生徒の活動や体験に関連して主体的な活動を行い、それに対しての生徒及び教師が「学びの証拠」を集め、保管し、評価しフィードバックすることで次への段階へとつなげていく。またその評価基準は明確なもので、生徒も加わってその基準の見直しを行っていくというものである。これらの活動、評価を通して生徒は意欲や関心を高め、自らの学びを振り返り、各自の活動に自信と誇りを持つようになる。このような評価が「生きる力」の育成で必要となる。

では、具体的にはどのような評価方法があるのだろうか。まず、これらの評価では学びの過程を種々の視点で収集することが重要となる。例えば、子どもがその時点でもっている概念のつながり(広がり)を見るための概念地図法や、ことばの広がりを探るための単語連想法、ことばで表現しにくいイメージの世界を探る描画法なども利用できる。これらの手法で子どもの学びを探り表現させ、教師による評価、また子ども間での評価をする中で、次なる課題を発見し、子どもが「真に」必要とする指導を計画することができる。

この他、実験・技能を見るためのパフォーマンステストや、教師による行動分析、発言分析、および質問用紙法や逸話記録法、インタビュー法、評定尺度法などもこどもの「知

## 第4章「LIFE」の事例、単元と評価

識、技能、感情、心身の性向」の発達状況を見る上で有用となる。

いずれにしても、学びの過程を評価し、次の段階に生かしていくためには、それぞれの評価基準を明確なものにしておき、生徒にも知らせておく必要がある。どの段階でどの方法による評価を行うか、短期的及び長期的な計画が必要であり、これらの評価活動を通して、教師は子どもの学びを支援していくことが重要である。

### ポートフォリオアセスメント

真正アセスメントの具体的な方法として、ポートフォリオアセスメントがある。ポートフォリオとは「紙ばさみ、折りカバン、書類携帯用ケース」を意味する語で、芸術家や写真家が売り込みのために自分の業績や作品をファイルしておく書類ばさみを意味する。このような入れ物に子どもの学習成果などを蓄積していき、これを教育評価の資料として活用していくのがポートフォリオアセスメントである。ポートフォリオには、子ども一人ひとりの学習過程及び成果に関する資料が長期的に蓄積される。よって、このポートフォリオの資料を見れば、それぞれの子どもの学習の歩みや到達度、さらには次に取り組むべき課題を知ることができるというものである。子ども自身、蓄積と振り返りをする中で、自己評価を絶えず行うことになり、自己の学びについて考えることになる。このような自己評価は「メタ認知的反省」ともいわれ、これを通して「子ども達自身の作業遂行と彼ら自身の思考を追跡し、アセスし、そして改善することに熟達することができるようになる」ことが大切である（高浦勝義、総合学習の理論・実践・評価、黎明書房、1998年より）

このようにまとめていくと、ポートフォリオが単なる学習記録帳ではないことがわかる。これを活用して、生徒自身が次の学びを展望することが大事で、さらに生徒への、教師への、教材へのフィードバックとしての活用が測られていくものである。

ポートフォリオアセスメントを実践する際、生徒達にその意義を十分知らせておく必要がある。その学習の年間計画および内容、目的、それに評価に当たった際の基準を明確にして取り組むことで、より主体的な評価ができるようになる。「総合的な学習」を学ぶ中で、どのような力がつくか、どのような変化が期待できるか、評価するひとりとしての生徒をつくり、教師はその支援者として評価活動を行うのである。

では、具体的にポートフォリオにはどのようなものが蓄積されるのだろうか。高浦によるとバークの28の情報群を例に挙げている（次表）

- |                 |                              |
|-----------------|------------------------------|
| 1．宿題            | 18．自己評価                      |
| 2．教師自身の小問題やテスト  | 19．ポートフォリオの内容についての教師や親への手紙   |
| 3．生徒仲間がつくった課題   | 20．将来の目標についての陳述              |
| 4．グループ作業（製作物や絵） | 21．自由な写真（基準なしの）              |
| 5．学習記録          | 22．演説、競技、討論、歴史劇の演出等の遂行に関する描写 |
| 6．問題解決記録        | 23．綴じるには大きすぎる個人やグ            |
| 7．学習の反省日誌       |                              |
| 8．地域プロジェクト      |                              |

## 第4章「LIFE」の事例、単元と評価

- |                             |  |
|-----------------------------|--|
| 9. 著述活動                     | ループによるプロジェクトの写真                                  |
| 10. その過程を示すための著述作品の下書き      | 24. 生徒が登録事項を記入した時と理由、及びそれを取り消した時を記したり論じた登録簿ないし記録 |
| 11. 演説、読み、歌、質問の仕方に関する録音カセット | 25. コンピュータのプログラム                                 |
| 12. 図式構成図                   | 26. 実験室での実験                                      |
| 13. 会議での質問                  | 27. 美術作業の見本（もしくは絵画）                              |
| 14. 態度や意見に関する質問紙            | 28. 作業遂行に関するビデオ                                  |
| 15. 他の子どもとのインタビュー           |  |
| 16. 観察チェックリスト<br>（個人及び集団）   |  |
| 17. メタ認知活動                  |  |

このように、ポートフォリオの蓄積される情報は多種多様であるが、これらの情報を整理し、例えばある観点についてどのように子どもが代わってきたかなどの成長ポートフォリオを作成したり、または、それぞれの段階で最も自身のある作品や成果をまとめたベストワークポートフォリオを作成する。これらを下に、生徒との会議を開きそれぞれの成長を発表させる活動も考えられる。

### 参考文献

教育課程審議会、児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について  
(答申)平成12年12月4日

高浦勝義著、総合学習の理論・実践・評価、黎明書房、1998年

高浦勝義著、ポートフォリオ評価法入門、明治図書、2000年

日本理科教育学会編集、理科の教育 2001年12月号、東洋館出版社